

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 19 日現在

機関番号：13902

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720218

研究課題名(和文) 国際英語としての「日本英語」の語用論的特徴の分析

研究課題名(英文) Identifying discourse-pragmatic characteristics of "Japanese English" as an international language.

研究代表者

藤原 康弘 (Fujiwara, Yasuhiro)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90583427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人英語使用者コーパス(JUCE)を利用し、国際英語としての「日本英語」の語用論的特徴の同定を試みた。JUICEとは「日本語を母語とし、日本で小中高の教育課程を経て、仕事で英語を使用するもの」による英語の集積データである(藤原, 2014参照)。この探索的分析により次の潜在的な傾向が見出された；1) 日本人英語使用者は英語母語話者よりも少ない種類の語彙を使用し、名詞の場合、定冠詞とともに同名詞を反復使用する；2) 法助動詞の使用において、日本人英語使用者はshould、mustという意味合いの強いものを頻用する。上記の両傾向は情報の受け手と相互作用する特徴である故、語用論的である。

研究成果の概要(英文)：This research aims to detect, if any, distinctive discourse-pragmatic features in the English written by Japanese professional "users" of English. The main research question is, "What, if any, are differences in the use of English between Japanese professionals and native speakers of English?" To attain this objective, this author compiled a Japanese User Corpus of English (JUICE), currently a one-million-word corpus of various news articles written by Japanese journalists (Fujiwara, 2014) and compared it with a similar set of Inner Circle linguistic data such as corpora and a wordlist. In a series of analyses, it was found that 1) "Japanese English" potentially has some characteristics such as (1) more repeated use of content nouns with the definite articles and less use of personal pronouns, and (2) more use of obligatory modals, "should" and "must." These two features can be regarded as "pragmatic" ones in the sense that they are more directly influenced by recipients of the message.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：国際英語 「日本英語」 コーパス言語学 語用論 学習者 使用者 第二言語習得 英語教育

1. 研究開始当初の背景

英語コーパス編纂の歴史は、英語母語国 (English as a Native Language) である英国ロンドン大学 (1959 年)、米国ブラウン大学 (1961 年) に始まり、その後、英語使用者の顕著な増加に伴う「国際語としての英語」の認識の高まり (e.g., Crystal, 1997/2003) を踏まえ、英語を母語とする国だけでなく英語を第二言語とする国・地域 (English as a Second Language) の 1989 年以降の書き言葉、話し言葉の言語データで構成される International Corpus of English: ICE (Greenbaum, 1996) が編纂された。

しかし日本、つまり英語を外国語とする国 (English as a Foreign Language) また国際語とする国 (English as an International Language) では、多くの英語「使用者」が国内外で活躍しているにもかかわらず、現存するコーパスは International Corpus of Learner English: ICLE (Granger, 1998) 等、主に大学生を対象とした「学習者」のものしか存在していなかった。インド等の土着化した英語と比較すると使用者数や使用域ともに限定されることを考慮しても、日本語を母語とし国内外に活躍する日本人英語使用者「日本語を母語とし、日本で小中高の教育課程を経て、仕事で英語を使用するもの」(藤原, 2006; Fujiwara, 2007)

は海外派遣の会社員、技術者、研究者、外交官、通訳・翻訳家、またジャーナリスト等、枚挙に暇が無いにも関わらず、現存するコーパスは「学習者」のみであった。

この状況を鑑み、筆者は 2005 年より日本人英語「使用者」による英語のコーパスを、まず報道に使用された英語を中心に編纂を開始し、研究成果を発表してきた(藤原, 2006, 2012; Fujiwara, 2007)。一般に国際英語、諸英語の両領域では、英語変種の特徴は次の順にみうけられると言われている: 語用、意味、語彙、音韻、形態・統語 (Kramsch, 1998)。当時、筆者は既に「日本英語」としての語彙的特徴の研究をある程度行っていたため (e.g., 藤原, 2012)、本研究プロジェクトでは、語用・談話的特徴に着目し、JUICE における言語サンプルを国際英語における「日本英語」と捉え、その探索的な分析を試みた。

2. 研究の目的

本研究は、日本人英語使用者コーパス (JUICE) を利用し、国際英語としての「日本英語」の語用論的特徴を探ることを目的とする。JUICE とは、国際英語コーパス (ICE) を参考にし、日本人英語使用者、すなわち「日本語を母語とし、日本で小中高の教育課程を経て、仕事で英語を使用するもの」(藤原, 2006; Fujiwara, 2007) により用いられた英語の集積データである。上述のように、この研究プロジェクトではジャーナリズムにて使用された英語に特化した仕様である。当コーパスの分析を語用論的見地からすすめ、「日本英語」の特徴を探索した。

3. 研究の方法

研究手法として、JUICE の書き言葉コーポラントと内円英語コーパスなどの品詞情報、および語彙情報を基に対照分析を行い、国際英語としての「日本英語」の語用・談話的特徴の同定を試みた。この分析は次の 2 段階で行われた; (1) 抽象度の高い品詞情報に対し多変量解析を行い、「日本英語」に特徴的な品詞タグの探索的調査を施行する; (2) JUICE と内円英語コーパスとの比較分析により一定程度キーワードとなる語彙を抽出し、その語彙から「日本英語」の潜在的な談話的・語用論的特徴とみなされ得る項目を提示し、先行研究結果、他コーパス、ワードリストを活用し適宜分析を深め、考察を行う。

4. 研究成果

(1) 品詞情報の多変量解析 (クラスター分析、コレスポネンス分析等) の結果、日本人ジャーナリストによって書かれた英語、すなわち「国際英語としての「日本英語」と内円英語の区分は一定程度、可能であることが示された (図 1, 図 2 参照)。なお J は日本人ジャーナリスト、T は TIME の内円英語の記者によって書かれたテキストを指す。

図 1: クラスター分析の結果

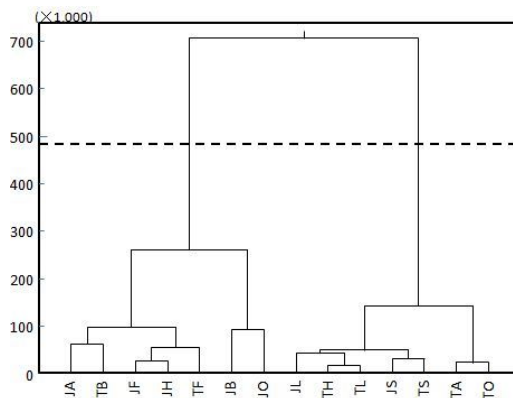
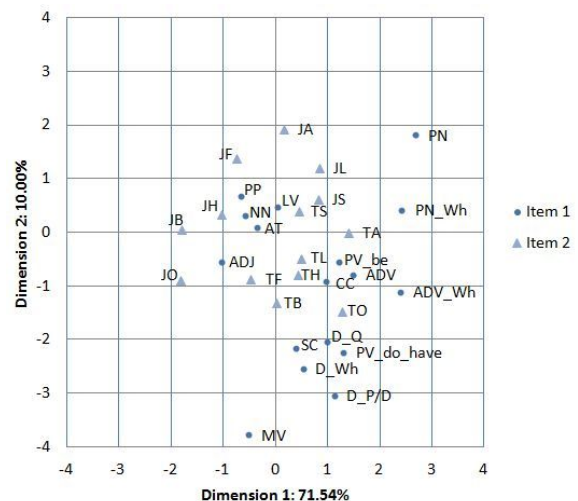


図 2: コレスポネンス分析の結果



また具体的な品詞の項目として、日本人英語使用者に特徴的と推定される品詞群は冠詞、前置詞、形容詞、名詞という名詞句を構成するものであり、一方、内円英語使用者に特徴的と推定される品詞群は決定詞(代名詞/指示詞・数量詞)、接続詞(等位・従属)、代名詞、副詞、動詞(第一助動詞 be/do/have)、WH語であり、その多くが機能語の性質を持つものであった。この分析結果より、日本人英語使用者は、相対的に代名詞を利用せず、内容語に依存する傾向があることが示された。

(2) 上記の分析をより深めるため、特徴語分析を施行したところ、下記の潜在的な語用論的特徴が見出された；日本人英語使用者は母語話者よりも相対的に少ない種類の語彙を使用し、名詞の場合、定冠詞とともに同じ名詞を反復使用する；法助動詞の使用に置いて、日本人英語使用者は should、must という比較的意味合いの強いものを頻用する。上記の両傾向は情報の受け手と相互作用する特徴である故、語用論的といえる。以下に考察をふまえてまとめる。

(3) まず上記の(2)の特徴より、「日本英語」は定型性、つまり同じ語をある程度繰り返し使用することを内円英語ほどは厭わない特徴を有することが示唆される。この同名詞と冠詞の多用という特徴は内円英語的発想では、monotonous とみなされるかもしれないが、新情報の提示の仕方における一種の「待遇的配慮」とも解釈できる。つまり定冠詞を使用し、読み手と何らかの形で情報を共有していることを明示し、同名詞の繰り返しにより明確に語彙的結束性を高め、読み手の認知的負荷を減らすための配慮とも考えられる。

国際的英字記事として日本の立場を発信する上での読者は、疑いの余地なく英語母語話者に限らず、さまざまな第一言語を母語とし、さまざまな能力層を有する第二言語使用者を含むことを忘れてはならないと考える。

また(2)の特徴は、おそらく文化的価値判断における日本の社会的義務意識の度合いの高さや範囲の広さが影響していると思われる。その根拠は、義務的法助動詞(should, must)の多用傾向は、日本人英語学習者のコーパス研究、および日本語から英語への翻訳社説におけるコーパス研究にて継続して指摘されてきた差異であるからである。

義務的法助動詞の使用には英語能力というよりむしろ文化的影響が強いと考えられる(Hinkel, 1995)。つまり儒教、道教、仏教の哲学、伝統、価値観の影響を歴史的に受けてきたアジア圏の英語学習者は、人間、社会、伝統の連帯認識から生じる他者からの義務的意識が生じやすく、should や must の法助動

詞群を多用し、一方、米国の内円英語話者は、相対的に伝統への認識が薄く個人主義が強いと推定されるため、個人的な積極的関与を示す "need to" を多用する傾向にある可能性があるとも考えられる(Hinkel, 1995)

ただ上記の(2)の、はいずれも、あくまで探索的アプローチによるマクロな分析であるため、一部の結果は今後より深める必要がある。これらの潜在的な語用論的、談話的諸特徴を含めて、今後は科学研究費助成事業、「国際語としての「日本英語」の談話的特徴の分析：コーパス準拠の仮説検証アプローチ」(課題番号：26870277)にて、継続的に精査していく所存である。

注：なお本報告は主として藤原(2014)、『国際英語としての「日本英語」のコーパス研究：日本の英語教育の目標』(東京：ひつじ書房)の第1章、第5章に基づく。

参考文献

藤原康弘. (2006). 「日本人英語使用者コーパス：JUICE」田畑智司(編)『言語文化共同プロジェクト・電子化言語資料分析研究 2005-2006』(pp. 47-56). 大阪：大阪大学大学院言語文化研究科.

藤原康弘. (2012). 「日本語から英語への借用傾向抽出の実証的試み」『アジア英語研究』14, 20-41.

Crystal, D. (2003). *English as a global language* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

Fujiwara, Y. (2007). Compiling a Japanese User Corpus of English. *English Corpus Studies*, 14, 55-64.

Granger, S. (1998). Learner English around the world. In S. Granger (Ed.), *Learner English on computer* (pp. 13-24). Longman.

Greenbaum, S. (Ed.). (1996). *Comparing English worldwide: the International Corpus of English*. New York: Oxford University Press.

Hinkel, E. (1995). The use of modal verbs as a reflection of cultural values. *TESOL Quarterly*, 29(2), 325-343.

Kramsch, C. (1998). The privilege of the intercultural speaker. In M. Byram, & M. Fleming (Eds.), *Language learning in intercultural perspective* (pp. 16-31). Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

藤原 康弘、「日本英語」の談話的特徴抽出の試み：品詞情報の多変量解析、『英語教育の新たなる展開(言語文化共同研究プロジェクト 2011)』、査読無、2012、23-32

〔学会発表〕(計4件)

Fujiwara, Yasuhiro, Discourse characteristics of English in news articles written by Japanese journalists: 'Positive' or 'negative?', Corpus Linguistics 2013, Lancaster University, UK (2013/7/25).

Fujiwara, Yasuhiro, Describing discourse/pragmatic characteristics of "Japanese English" as an international language., 2013, the 32nd JAF AE conference, Osaka University, Japan (2013/6/22).

Fujiwara, Yasuhiro, User corpora in the Expanding Circle: Are expanding circle speakers of English permanent learners?., 2013, Hawaii International Conference on Arts and Humanities, the Hilton Hotel, USA (2013/1/12).

Fujiwara, Yasuhiro, Discourse and pragmatic characteristics in journalistic English written by Japanese users of English: A corpus-based analysis., 2013, Hawaii International Conference on Arts and Humanities, the Hilton Hotel, USA (2013/1/12).

〔図書〕(計1件)

藤原 康弘、ひつじ書房、国際英語としての「日本英語」のコーパス研究：日本の英語教育の目標、2014、258.

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤原 康弘 (FUJIWARA, Yasuhiro)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90583427